



初期症状を見落とさないために

—異変を感じたら、早期に専門医の受診を

認知症は高齢者に多い病気だが、年齢が若くても発症することがあり、65歳未満で発症した場合は「若年認知症」という。

現在、全国で200万人を超える認知症患者の中で、若年認知症患者は4万人ほどだが、本人が気付いていないケースもあり、推定患者数は10万人とも言われている。

40代、50代の働き盛りで発症する若年認知症は、本人だけでなく、職場や家族の生活にも大きな影響をおよぼすが、どういった対応が必要なのか、企業や医療・介護の現場でも十分認識されていないのが現状だ。



作家・ジャーナリスト

藤本美郷

Fujimoto Misato

出版・編集および文化人所属プロダクション「Mプランニング」代表。作家・ジャーナリストとして取材・執筆多数。熱心な取材と温かい目線で描かれた作品には定評がある。特に生命・医療など、人間の原点に迫るドキュメンタリーを得意とする。著書に『ドキュメント 若年認知症』（三省堂）、出版プロデュース『手足のないチアリーダー』『あきらめないで』（共に佐野有美・主婦と生活社）、近書に『わたしが芸術を語るなら』（千住博・ポプラ社）など多数。



『ドキュメント 若年認知症』（三省堂）

何を食べたかではなく 食事したこと自体を忘れる

“メガネ、リモコン、財布などの置き忘れ”“朝食食べた物を忘れた”“顔は分かるが名前を思い出せない”等々…、心当たりはないだろうか？ このような症状が現れると「これって認知症？」と質問されることがある。しかし、このような記憶の一部だけを忘れるものは、いわゆる「物忘れ」だ。加齢とともに記憶力は低下し、注意力も散漫となるが、年齢による記憶の衰えは誰にでもみられるものであり、単なる「物忘れ」の範囲と考えていいだろう。

それに対し、「電話などかかっていない」「ごはんを食べていない」など、“電話がかかってきたこと自体を忘れる”“食事をしたこと自体を忘れる”といった症状がある場合は注意が必要だ。行動自体の記憶が抜け落ちてしまうのが、「認知症」の特徴的な症状であり、進行すると、家族の顔を忘れる、慣れた場所で迷子になる、などの症状が現れる。

とはいえ、働き盛りの年齢で物忘れが多いという人は、認知症の初期症状

として見逃せない場合もあるので注意を促したい。

記憶障害や失語のほか 乱暴な言動など人格変化も

若年認知症とは、脳の神経細胞が損傷することにより、物事の認識力、記憶力、思考力、判断力が低下し、社会生活に支障をきたす病気だ。原因疾患の代表的なものは「アルツハイマー病」だが、そのほかに「脳血管障害」「レビー小体型認知症」「ピック病」などがあり、それぞれ症状が違う。

アルツハイマー病では、記憶障害（新しいことが思い出せない）、実行機能障害（段取りが立てられない）、失語（言葉が出ない）、失行（服が着られないなど）等があり、最終的には脳全体が委縮していく。

脳血管障害は、アルツハイマー病に比べて脳の一部が段階的に侵されることから、症状がまだらに出るのが特徴だ。

また、レビー小体型認知症では、手足の震えや動作がゆっくりとなるなど、パーキンソン病のような筋肉の硬化が見られる。また、見えないものが見え

たりと、幻覚や幻視に悩まされる。

ピック病を抱える家族が口をそろえるのは、「性格が変わってしまったようだ」というもの。感情を司る前頭葉が損傷されるため、性格変化や意欲障害がみられるようになる。他人の庭に入り果樹の実をもぎったり、店のものを勝手に持ってくるなどの反社会的な行動が目立ち、自分の行動を止められたりすると、「怒鳴る」「叩く」など手が出る。「毎日夫が怒鳴ってばかりで、心身共にくたくたになってしまった」「やさしかった夫がまるで人が変わってしまい、つらくて離婚も考えた」「病気は悲しいが、かえってホッとした。夫が変わったのは病気のためなのだ」と自分に言い聞かせているなど、家族はその窮地を訴えている。

認知症と気づかず 本人や家族が苦しむことも

若年認知症の患者が通う若年認知症サポートセンター「絆(きずな)や」(代表・若野達也氏)のセンター長・恩塚浩史さんは、ピック病の患者に付き添ったときのことをこう話す。「やりたいことはずっと続けさせてあげます。例えば、野球が好きだった人は3時間でも4時間でもキャッチボールをやります。入所者の方が元気で体を動かせるということはいいことなので気が済むまで付き合います。こちらも腕と脚がパンパンになってしまいますが、体力がつかまりました」と、笑顔を見せる。ドライブがしたいという患者には、助手席に乗せ気が済むまで走り続ける。座っていることができない患者には、何時間も散歩に付き合う。その他にも「立ち入り禁止の山の中へ行きそうになったので、止めたら手を出されてメガネが飛んだことがあります。赤信号を渡ろうとするなど、危険が伴う場合は何をされても止めざるを得ません」と介助も緊張の連続だ。

夫がピック病にかかったある妻は、何時間も外を歩き回る夫の後を、菓子

折りを10個も抱えて付き添うという。「他人様の庭や入って行けないところに勝手に入ってしまうこともあって、その度にご迷惑をおかけした方々に病気のことを説明して菓子折りを渡しているんです」。このようにピック病では、周りの対応が非常に難しい。

この他、脳の病気が認知症を引き起こすこともあり、早期に手術や適切な処置を行えば治癒、改善する場合もある。加齢による「単なる物忘れ」なのか、脳の委縮かは、自分では判断がつかないので、本人が「何か変だ」という段階で、また家族が「いつもと違うようだ」と感じたら、まず検査を受けること。認知症と気づかず、患者本人や家族が苦しんでしまうことのないよう、また少しでも病気の進行を遅らせるためにも適切な検査や治療、リハビリテーションが必要となるので、早期に専門医を訪れることが重要だ。

診断が遅れたため 職場でもトラブルに

家族がまず異変に気付く場合もあるが、「会社からの連絡で初めて夫の異変に気付いた」「職場の方々は大いぶ前から夫の変化に気付いていた」というケースも少なくない。家では職場と違いリラックスをしており、多少おかしな行動をとっても、妻は「お父さん、ちょっと気をつけてよ」と言うくらいで、重く考えないことも多いようだ。

「コピー機の前でしばらく佇んでいた」というYさんは、普段使っているコピー機の操作が分からなくなった。その後、職場で自分の席を間違える、受けた電話の内容を忘れるなど、他人には分からない小さな異変が続いた。

あるとき、自分のパソコンのパスワードが分からなくなり、隣の席の部下に尋ねた。部下は当初はうっかり忘れたのか、と気にも留めなかった。しかし、パスワードだけではなく、会議の時間や場所など、何度も何度も同じことを



尋ねられるようになり、おかしいと思い始めた。

このとき、本人も「何か変だ」と悩みを抱えながらも、電話の内容を細かくメモする、など自分なりに工夫を重ねた。その後、会社の中で迷子になったり書類の置き忘れなど、ミスが続いた。「こんなことが分からないはずがない」という気持ちが先に立ち、なかなか周りに言い出せなかった。そのうち大事な商談の電話があったことさえ忘れてしまい、メモも役に立たなくなった。

この時点で、職場でも「周りに迷惑がかかる」「もっと真剣にやってほしい」などの不満が噴出。隣の席の部下は「自分の仕事にも支障が出ている。この人を異動させないなら会社を辞める」というところまで関係がこじれた。その後、Yさんは専門医を訪ね「若年認知症」と診断された。すでに病状は進み、初期から中期の段階に入っていた。

他の患者でも診断が遅れたため会社で数々のトラブルを起こし、診断を受けないまま退職へと追い込まれたケースもある。あるいは、会社が紹介した病院で「うつ」と診断され、しばらく抗うつ剤を飲んでいたが、症状は改善されず、結局は認知症で症状が進行してしまったという報告もある。

普段やっている簡単な作業ができなくなったら、うつだけではなく、若年認知症も疑うべきだろう。

会社としても若年認知症に詳しい医療機関を紹介できるよう専門医の情報を把握しておくことが必要だ。